

かながわ精神科病院訪問記 VOL : 3
(2025年度)

いって・みて・きいてきた

～わたしたちの視点で見学してきた～

(対話はつながる・・・)



目次

■はじめに

堀合悠一郎

■病院訪問

No	病院名	訪問日
1	公益財団法人積善会 曾我病院	2025年7月23日
2	医療法人社団清伸会 ふじの温泉病院	2025年9月17日
3	医療法人社団元気会 横浜病院	2025年10月9日
4	医療法人財団青山会 みくるべ病院	2025年10月25日
(参考)	医療法人和気会 新生会病院	2025年4月26日
	医療法人社団新新会 多摩あおば病院	2025年11月27日

■座談会

～4つの病院訪問を終えて～

■KPとは・・・。

■おわりに





はじめに

KP神奈川精神医療人権センター 堀合悠一郎

国による精神科病床削減の動きが進んでいるなど、政策レベルでもメンタルヘルスの領域は大きな変化のただなかにある、そんな今、KPとして3冊目のかながわ精神科病院訪問記をお届けする運びとなりました。

社会情勢や施策の変化はあっても、精神疾患の辛さそして痛みには容易な変化を拒むものがある…KPとして、当事者の痛みに寄り添い、立場を超えてともに考え、対話し行動する場づくりは、変わることなく継続しなければならないと、改めて痛感しています。

病院訪問活動も3年目に入り、精神科医療機関への見学および対話と交流から、知識のベースが少しずつですが積み重なり始めました。これから先、この活動を、どう継続・進化させていけば、安心してかかることのできる精神科医療の実現にもっと寄与できるだろう？ と、KPでは日々わいわい話し合いながら、今日も活動を続けています。

手に取ってくださった皆様それぞれご自身の想いを大切に、KPの活動に関心を寄せていただけますと幸いです。そして、ぜひ、周りの方たちと対話のきっかけにいただければと思います。

なお、本書は神奈川県福祉子どもみらい局 共生推進本部室の協力を受けて発行いたしました。サポートに感謝いたします。

【この冊子について】

2023年に6病院に伺い、その経験をまとめた冊子が「いって・みて・きいてきた～精神科病院を見学してきた～（さいしょの一步）」です。

2024年にはさらに9病院に伺い、2冊目の冊子「いって・みて・きいてきた～わたしたちの視点で見学してきた～（対話のはじまり）」を発行しました。冊子をきっかけに報告会を開催したところ、60名を超える方が参加してくださり、活動を知っていただくとともに、多くのご意見をいただくことができました。

今年度は、あらたに4病院に訪問を行い、この「いって・みて・きいてきた～わたしたちの視点で見学してきた～（対話はつながる・・・）」の発行をすることができました。

2023年からの3年間で、70病院の内19病院の訪問をすることができました。それは、なんといっても病院さんの協力をいただけたからです。私たちはここで立ち止まらず、100%の訪問を目指していきたいと思っています。

【この冊子の見かた】

- ・神奈川県内の精神科病院の概要は、KP神奈川精神医療人権センターのホームページで公開しております。ぜひ合わせてご覧ください。
- ・この訪問記は、KPの事務局とボランティアが訪問したその日その時の報告になっております。情報などが更新（変更）されている場合もあります。ご了承ください。
- ・また、訪問はわたしが（または家族が、友人が・・・）受診するなら入院したならどう思うだろう（感じるだろう）という患者さんの視点で感じたことをまとめています。あくまで患者さんの視点であることを前提としてご覧ください。
- ・ここがわからないな～とかここはどうなっているの～という点がありましたら、ぜひKP事務局までご連絡ください。



基本情報

住所	250-0203 小田原市曾我岸148	
電話	0465-42-1630	
病床数	285床	※2025年4月に地域移行機能強化病棟は閉鎖になっている
病棟科病棟・病床数	<ul style="list-style-type: none"> ・救急急性期病棟（52床） 認知症治療病棟（53床） ・精神療養病棟（3病棟：180床） 	
アクセス	JR御殿場線下曾我駅 徒歩5分	



当日は、病棟の師長さん、そして看護部長の早瀬さんと副院長の山口先生のお話しを伺うことができました。ありがとうございました。

【ホームページ】

入院する際に必要な経費や持ち物がきめ細かく記されている他、デイケアの紹介などは、自分も参加したくなるような書きぶりとなっています。また常勤医師の一覧表や、入院患者の平均在院日数などの診療情報も掲載されています。ただ、医師については病院内の肩書など僅かな項目が記載されているのみで、利用者としては、自分の病いを預ける対象であるだけに、経歴や専門分野など、もう少し詳しく知りたいところだと感じました。

【建物全体と外来など】

JR御殿場線下曾我駅から徒歩で5分ほどの場所にある。外観はレンガ調の落ち着いた色彩で、内部は間接照明や曲線などから柔らかな雰囲気が醸し出されている。また、作業療法で作られたお花が飾られていて心が和む。外来のエリアには、前室が設けられていて、外来待ちの時間も落ち着いて過ごせそうだと感じた。

【病棟】

明るい雰囲気、木質系で柔らかな印象の空間。作業療法で作られた作品が飾られている。患者さんご自分の洋服を着られていて、パジャマの人はいなかった。吹き抜けに面してベンチシートがあり、また中庭にはみどりと水槽があり金魚が飼われていた。ホールにはお祭りの飾り付けがされていた。中庭ではギターを弾いている方もいた。

認知症病棟には、白樺の林の壁紙のコーナーがあり、お正月にはダンボールで神社をつくりお詣りをされることでした。

療養病棟は、9：00～16：00の間はドアが開放されて外出ができるようになっている。



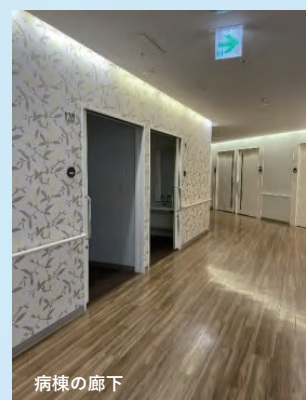
曲線がきれいなホール



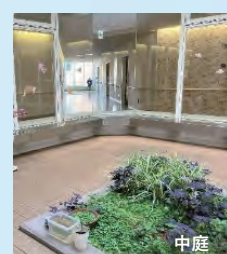
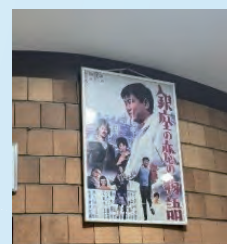
ホールのテーブルに置かれたお花



廊下から中庭が見える



病棟の廊下



中庭



飾り付けられたホール



【ホールなど】

ホールに面してナースステーションが設けられていて、患者さんからも声をかけやすい雰囲気だった。

ホールには雑誌がおかれている。

掲示板にはさまざまな案内の掲示があった。医師の予定表もわかるようになっている。

食事は、汁物は病棟で盛り付けられるようになっていて、あたたかい食事が楽しめそう。また、特別食がありカレーライスや冷やし中華やパンなどを追加注文することもできる。

「ふれあい箱」というご意見箱があり、提案や意見を伝えることができる。個別や全体での対応など対応されている。

ドリンクの自販機と給茶機がある。

「病棟でのお困りごとについてみんなで相談しませんか？」という患者さん同士で対話ができる会をはじめられたとのこと。ナースステーションに近い部屋に観察が必要な人が入院している。保護室と通常の病室の中間領域がある。



【病室】

4人部屋と個室がある。個室は、外から鍵をかけることも可能になっているため、630調査では保護室にカウントされている。各ベッドにはナースコールと手元灯があり、また吸引などの治療ができる設備が整えられた病室もある。クローゼットと収納があり、鍵のかかる引き出しもある。部屋は窓が大きく外部のみどりが眺められ明るい。



【電話】

ホールに面して、公衆電話が設置されている。扉で仕切られていて、椅子も用意されている。

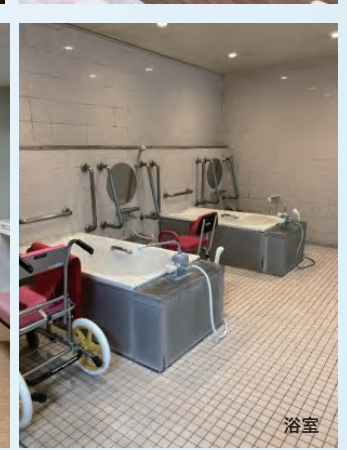
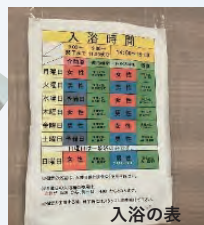
※認知症病棟は、ナースステーションのカウンターに設置されている。



【浴室】

3人から4人が一度に入浴できる介助浴もできる浴室と個室がある。午前中は介助浴、午後は男性の日と女性の日が分かれていて使用できる。個室は毎日でも入浴することができる。（予約が可能）介助浴の人は週2回。

認知症病棟では、入浴介助の専門のスタッフを雇用しているとのこと。



【洗濯機】

カード式の洗濯機と乾燥機が設置されている（認知症病棟にはない）。

療養病棟には、患者さんが使える掃除用具がある。

【保護室】

救急急性期病棟には保護室が4室ある。管理廊下の先に外部のみどりがみえる。フローリング風の床の上にマットが敷かれている。床も壁も角が曲線になっている。カメラはない。トイレは少し奥まったところにある。廊下側から覗くことができる窓が設置されている、顔は確認できるが下部はみえないように工夫されている。

【面会室】

病棟の外、風除室に面し、設けられている。時間外の入院の方の対応をする空間としても使われているとのこと。

面会は予約制で時間は15分と制限がある。予約は電話またはメールで行えるとのこと。



	午前	昼	午後
期1	8:00-9:30	11:45-12:30	13:45-14:30
期2		12:35-13:30	14:35-15:30
期3	10:15-11:30		13:35-14:30
期4		12:35-13:30	14:35-15:30

【そのほか】

・売店について

本館の2階に売店がある。レストランはコロナ禍で閉店とのこと。

・面会について

コロナ禍前までは、面会は病室でかつ時間も制限なく行えていたというのが、コロナ禍を境に時間や場所の制限が厳しく決められているとのこと。制限を緩めるなどは今のところ検討されていないとのこと。

・携帯電話について

携帯電話を使用することは認められていない。ただ、外出が認められた人は外出時に使用することができる。個人情報のことや充電コードのことが課題とのこと。

療養病棟に入院の方は、長期の入院の方も多く、携帯電話の必要度が低い方が多い。また、ご家族が金銭管理をしていることも多く、携帯電話代を認めないこともあるとのこと。

・喫煙について

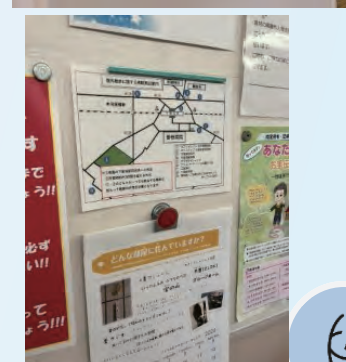
外出が認められている人は、外出時に喫煙ができる。

・ピア活動

地域のピアが来院して活動している。

・退院支援

退院支援会議を月に1回開催し、全員で話し合いをしている。



<KP訪問日誌>

JR御殿場線、下曾我駅にある曾我病院は90年以上の歴史を感じさせる雰囲気のある大きな病院であった。7月、猛暑の午後の訪問であったが、山口副院長、早瀬看護部長、そして各病棟を案内して下さった3名の看護師の方々には、4時間強の時間を職責をもって対応していただいた（皆さまありがとうございました）。

全体的には看護師やスタッフの皆さんは熟練度の高い方が多い印象で、病床数の多いこちらの病院で患者がなるべくストレスなく過ごせるように上手にオーガナイズしているように感じた。

『病院での困りごとについてみんなで相談しませんか?』というグループミーティングを始めたようで、「診察」ではない「場所」で、患者さんが日常的に思っていることを「気軽に」伝えられるようになるなら素晴らしい試みだと思う。

一方、「携帯電話」の取り扱いや、「面会」についての様々な制限には、患者や家族にとっての「改善」をお願いしたい。また、長期入院（60年入院されている患者さんも）も気になる点である。

現在の精神科医療において我々が考える「病院」と「地域」の向かってほしい方向性もとても理解されている印象を持った。そういう意味で、神奈川県精神科病院の中で、歴史ある曾我病院の精神科医療の「現代性」が果たす役割は大きいと思う。

今回の病院訪問に際して曾我病院の対応に敬意を感じた。と同時に、訪問・取材させていただくにあたってのこちらの「時間」と「深度」を検証することも必要であると思った（反省を込めて。）（平井）

KPとしての病院訪問が初めてでしたので、やや緊張しました。まずは皆さんについて行って体験してみようと、自分の気持ちを整理して落ち着けました。

病院は患者さんの療養空間ですし、プライバシーのこともあるし、誰でも気軽に行かれるところではありません。法的根拠もない、患者さんの直接的な支援者でもないKPの訪問を、「受け入れる」判断をする病院に対して、まずは敬意と感謝を感じました。

どのような心持ちでいたらよいのか、どのような質問をしていいのか大いに迷っておどおどしながらついて行きました。皆さんが次々小さなことまで質問されるのでびっくりし、師長さんたちが次々細かく答えてくださるのでまたまたびっくりしました。せっかく訪問を受け入れてくださったので、KPとしては遠慮せず聞きたいことは聞くのが責任であり礼儀なのだ、だんだんわかってきました。

病院との「対話」がひとつのコンセプトなのだから、この体験をKPに共有することが対話につながるのかなと思います。まずはこの報告ですね。

病院側のメリットは？あまりはっきりした回答は得られなかったのが残念です。何かもっとあると思うのですが、曾我病院の中でも、KPの訪問がどのように報告され共有されているのか、いつかまたやりとり、対話ができるといいと感じます。（大倉）

患者との面会について、コロナ禍が一時よりおさまっている今も面会時間は1回あたり15分に限られているということです。理由としてコロナ等の感染予防が挙げられています。柔軟な運用を心がけているとのことですが、コロナ感染の位置付けが5類に移行してから既に2年余り経過した今、果たしてこれ程の制限が必要なのかということには疑問を持ちました。

たしかに病棟内でコロナの感染が広がった時の大変さは想像に難しくありませんが、それは患者との面会に主な原因があったのでしょうか？病院のスタッフや出入り業者など、毎日、病院の内と外を行き来している人たちはたくさんいます。その中で、家族等との面会を厳しく制限する科学的根拠はあるのでしょうか。会いたい人と心置きなく会うことは患者の基本的な人権であり、またそれが入院患者のリハビリにもたらす効果は、多くの場合、量り知れないものがあると思います。面会に厳しい制限を設けている病院はまだ数多くありますが、そうした病院では、感染症のリスクと、面会によって得られるものの大きさを改めて天秤にかけて、ご検討をお願いしたいと思います。（稲川）

訪問を終えて振り返ってみると、曾我病院は“一律じゃない”んだなあ…という思いが残りました。お風呂も、洋服も、食事も、たばこも、携帯電話も——「一律に禁止」や「みんな同じに」ではなく、その方に合わせているんだと感じました。

ある病棟では、中庭でギターを弾いている方に会いました。ブルーのシャツに、真っ赤なネクタイ、そしてサングラス。なんとも気持ちよさそうで、その雰囲気がずっと心に残りました。「写真を撮ってもいいですか？」とお声がけすると、笑顔でOKをいただいて…その一瞬のやりとりも、とても温かかったです。

後日、この病院訪問冊子の原稿を看護部長の早瀬さんに確認していただいたときのこと。「患者さんの姿が写っているんですが、大丈夫でしょうか…？」とお聞きすると、早瀬さんは「この方が良いと言えば、それでいいんですよ…」とおっしゃっていました。

ああ、ここでも“一律ではない”んだ。その方、その方をきちんと見ているんだ——そんなふうを感じた瞬間でした。（矢ヶ崎）

② 医療法人社団清伸会ふじの温泉病院

基本情報

住所	252-0186 相模原市緑区牧野8147-2	
電話	042-689-2321	
病床数	472床	精神科 256床
病棟科病棟・病床数	精神療養病棟（5病棟：256床） 医療療養病棟（内科）（4病棟：216床）	
アクセス	JR中央線 藤野駅から送迎バス15分	



当日は、事務長の塩川さん、医療相談室の佐藤さん、看護部長の不動田さんほかスタッフのみなさんにご協力いただきました。



ホールにある映画などの掲示

【ホームページ】

トップページはお知らせが適時更新されている。病院の理念やコンセプト、機能などがまとまっており、わかりやすい。

医師やスタッフの人数、氏名や経歴、そのほか治療実績や、入院期間や行動制限の処遇などの情報を提供してほしい。

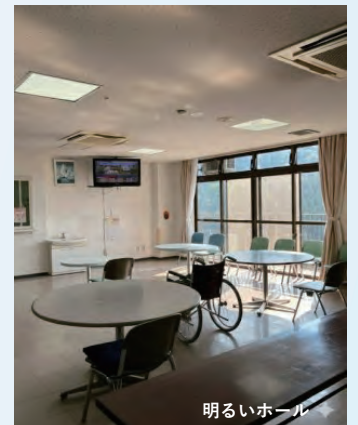
【病棟】

本館の2Fと4Fから7Fまでの各階が病棟(計5病棟、各病棟の病床数は約50床)になっている。昭和54年設立で病棟はやや老朽化しているように思われた。ナースステーションの前にはテーブルや椅子が置かれたスペースがあり、入院患者が思い思いに休んだりしていたが、そのスペースは病棟ごとの機能訓練や作業療法を行う場所としても利用されている。

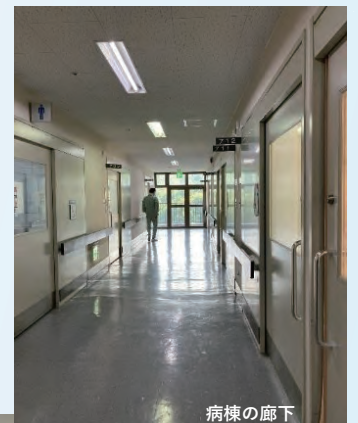
病棟の中心にナースステーションがあり、そこから左右と後の3方向に廊下が伸び、廊下を挟んで両側に病室が並んでいる。病室には個室、2人部屋と4人部屋がある。

廊下は少し幅が狭く明るさもやや不足していたが、入院患者が歩いたり、車いすで移動したりしていて、スタッフとすれちがうとあいさつを交わしていた。スタッフと患者との距離感が近く、病棟内の雰囲気は穏やかで落ち着いているように感じられた。

エレベーターは職員が暗証番号を入れて稼働する。ナースステーションは、上半分がガラスで、内部がよく見える。



明るいホール



病棟の廊下



ナースステーション

【病室】

窓は大きなガラス張りで採光はよい。窓からは周囲の小高い山々が見え、眺望は良好である。窓は施錠されていて開かない様式である。

ナースコールは設置されている。床頭台が置かれているが、現金や貴重品は病院が管理している。

入院患者は、廊下を歩いていたり、ナースステーションの前のホールで過ごしていたりしている患者もいたが、多くは病室で過ごし外部からの刺激が少ない環境と思われた。

- ・個室料は平均10,000円（5,500円～11,000円）/1日（応相談）
- ・テレビ利用料は日割りで220円
- ・小遣いの出納管理料は日割りで55円。

【トイレ】

男性用と女性用は区別されている。清潔に保たれている。車いす介助用のトイレが多く、個室戸はカーテン式。

【浴室】

浴室は広く、浴槽も大きい。洗い場には3人分の蛇口・シャワーが設置されている。回数は週に1～2回で、病室ごとに入浴する。

主にスタッフが付き添う介助浴のため、スタッフ人員の観点から個別浴や希望での追加の入浴はできないとのこと。

なお、以前は温泉が湧いていたが現在は普通の沸かし湯であるとのこと。

【電話】

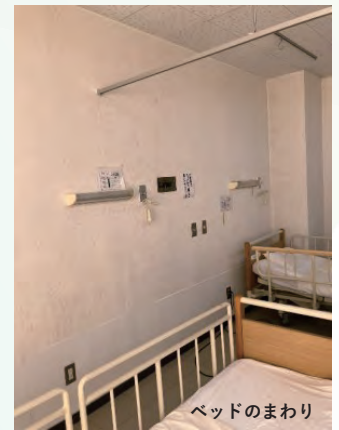
ナースステーションの横に公衆電話が設置されている。現金（小遣い）は病院が管理しており、電話の申し出の際に小銭を受け取る。プライバシーの観点から、パーテーションや個室などの環境を望みたい。

【ご意見箱】

ご意見箱がナースステーション横の壁に設置されている。週1回中身を確認し、医療安全委員会で検討している。回答を張り出してはいないが、差出人が判る場合は個人へフィードバックしている。スタッフからの匿名意見も受け付けているとのこと。



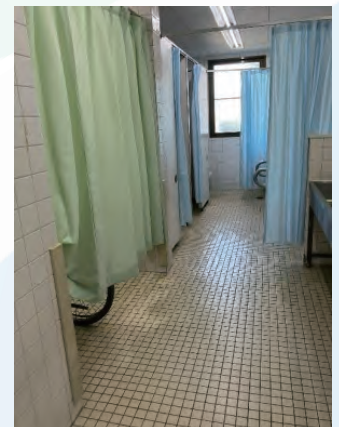
病室の様子



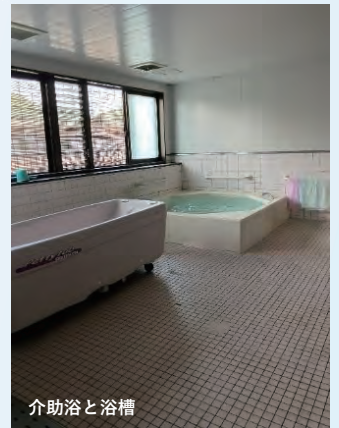
ベッドのまわり



トイレの様子



浴室



介助浴と浴槽



脱衣室



浴室の入口にはのれん



【面会】

面会時間は14:00から16:00までで、回数や滞在時間には特別な制限はなく、家族が病室に入ったり、患者とともに外出したり敷地内を散歩したりすることもできるとのこと。

【リハビリテーション】

個別リハビリテーションに力を入れている。

理学療法室・作業療法室・機能回復訓練室・言語聴覚室がある。疾患別に、医師の指示により各リハビリテーションが受けられる。

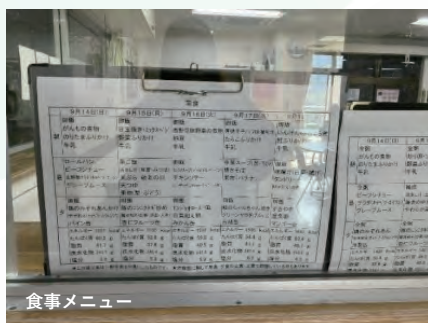
身体的なリハビリテーションとして、例えば骨折や怪我の回復のためのリハビリ、長期入院患者の身体機能の衰えやADLの維持、拘縮の緩和、廃用症候群のリハビリ、トイレやベッドの移り座りの練習などもおこなわれている。入院患者のうちリハビリテーションを受けている割合は50%以上とのこと。

【そのほか】

- ・患者さんは衣服はすべて（下着も含め）リースとなっている。そのため、洗濯が必要にはならず患者さんが使える洗濯機はない。
- ・療養病棟であるため保護室は設置されていない。ただ、ナースステーションの並びに観察が必要な方が優先的に使用する個室がある。
- ・売店は設けられていない。お菓子その他の日用品などの買い物は、スタッフが週1回、患者さんの希望を聞き代行購入しているとのことまた、インターネットでの購入などの補助もしている。
- ・食事は3食とも、病院の栄養課により給食を提供している。季節ごとのイベントには特別メニューを出しているとのこと。（敬老の日は天ぷらでした）
- ・図書室があり、時間制限はあるが、本を読むことができる。
- ・内科病棟もあるため、CT、レントゲン、内視鏡室などが完備されている。合併症の治療や、胃瘻の造設・ケアについても病院内でフォローできる。



リハビリの様子



食事メニュー



図書室の様子

【気になっていたこと、きいてみました】

ふじの温泉病院は、病棟はすべて療養病棟で、高齢者の比率が高く、認知症や身体合併症を抱えた患者さんも多いです。2024年の630調査によると、入院患者235名のうち40歳未満はわずか9名、40歳以上65歳未満が83名、65歳以上が143名でした。そのうち身体拘束が69名であり、拘束の割合は約30%と高い水準にありました。現在の病院での身体拘束についての取り組みや、退院支援のことについて、きいてみました。

「ここ数年、特に身体拘束や安全ベルト、ミトンなどの処遇の最小化を強化して取り組んでいます。行動制限最小化のためのカンファレンスを全体では月1回、病棟では随時行っていて、〈**身体拘束の開放・終了へ向けてのマニュアル**〉を作成しました。研修会も実施し、多くのスタッフが参加しています。その成果で（グラフやデータ、議事録資料なども見せていただきました。）行動制限は、徐々に減少しています。」

「スタッフ（とくに看護助手）が不足していて（病院の立地条件も影響しているとも考えられるようです）、行動制限の最小化のためにはスタッフの人数の確保も重要な課題だと思っています。」とのことでした。

また、退院支援についても伺ったところ、「認知症や身体合併症を多く受け入れしている療養型の機能の病院であり、中長期入院で療養されている方が多いです。退院支援は、家族から転院や介護施設への入所などの依頼で行うことが多いです」とのことでした。

わたしたちのたくさんの質問に、じっくり時間をさいて応じてくださった塩川事務長や相談室のみなさん、病棟スタッフのみなさん、ありがとうございました。

ふじの温泉病院は、山梨県との県境に近く、陣馬山を始めとする奥多摩の山々や相模湖に囲まれており、自然豊かな環境にある。

広い敷地には、老健施設のほか、精神科の本館（5病棟）と内科の新館（4病棟）が棟続きに建てられており、身体合併症にも迅速に対応できるようになっている。病棟は、精神科、内科ともすべて療養病棟であり、いわゆる療養型病院である。

精神科の病室は、2人部屋か4人部屋で、窓は大きなガラス張りで室内は明るく、周囲の山々もよく見える。病室は昼夜を問わず施錠されていないとのことで、比較的元気な患者さんが病棟内の廊下を歩いたり、車いすに乗ったりして自由に移動し、すれ違う看護師さんらと言葉を交わしている姿が見られ、和やかで明るい雰囲気を感じられた。家族との面会は午後2時から4時の間で、家族は病室に入って患者と話すことができるし、病院の周辺を患者と散歩することもできるとのことで、自由度が高いと感じられた。また、理学療法室を見学すると、室内はとても広々とし、設備も整っており、数人の患者が実際に理学療法を受けていた。充実したリハビリが提供されている様子であった。

他方、気になる点もあった。まず、公衆電話がナースステーションのカウンター上に置かれており、プライバシーに対する配慮を感じられなかった。また、着衣は下着を含めてすべてリースになっていて、自由に服装を選べない。入浴の回数が週1～2回で希望による追加は認められていない（その理由はスタッフの人員不足ということである。人材確保にはいろいろとご苦労があるようであった）。また、病室を見回るなかでは、腹部を拘束帯でベッドに固定されている患者さんもみられた。630調査においても、隔離・拘束の割合は約30%と比較的高い。しかし、病院スタッフの説明では、行動制限最小化のため、病棟内や病棟の枠を超えたカンファレンスを実施しており、少しずつ隔離・拘束が減ってきているとのことであり、その成果に期待したい。

最後に、退院支援の状況について尋ねたところ、介護施設への入所が決まった場合を除いて特に退院支援は行っていないとのことであり、その理由としては、地域に退院患者を受け入れる事業者がないという点が挙げられていた。確かに、他の病院から転院してきた患者が多いことや病院の立地条件などからすると、地域との連携に基づいた退院支援は相当に難しいのかもしれない。とはいえ、いったん入院するとなかなか退院が難しい療養型病院の現状には少し気持ちが重くなった。しかし、翻って考えてみると、このような状況は、治安維持のため精神病患者を隔離するという国策のもとに、市街地から離れた場所に多くの民間精神科病院を設立した精神医療の負の側面でもあるのかも知れない。地域移行へ向けた責任を個々の病院だけに負わせるのではなく、病院の実情に応じた国等の支援が必要ではないかと思った。
(倉沢)

JR藤野駅から、病院の送迎バスで15分ほど山道を走ると、広大にひらけた敷地に大きな駐車場と病院建物2棟、ふじの温泉病院に到着しました。

5つの精神療養病棟（256床）と、4つの内科病棟（216床）の大きな病院です。主に全体が療養病棟で、県内（内科・精神科などから）転院してくる患者さんも多い病院です。また、精神科では珍しく理学療法士や言語聴覚士によるリハビリテーションも受けられる設備があります。精神科病棟は入院患者の75%以上が1年以上の長期入院で、高齢（統合失調症や認知症の診断）の割合も高い病院です。隣接する内科とも連携し、身体合併症の治療や各種リハビリにも力を入れていることが分かりました。

630調査のデータから、身体拘束の処遇が多いことも気になっており、スタッフの方々に事情を伺いました。近年は病院をあげて行動制限最小化についての取り組みをしているそうです。「転倒や転落によるけがの防止や医療安全も大事だが、少しの意識化や工夫で身体拘束を減らしていけるのではないかとこれはチャレンジです」と塩川事務長らのお話しが印象的でした。院内でのミーティングや研修、意見交換を事務方も含め様々な職種で様々な角度から検討し、話し合っているそうで、病院独自で身体拘束終了へ向けたマニュアルも作成して取り組んでいました。

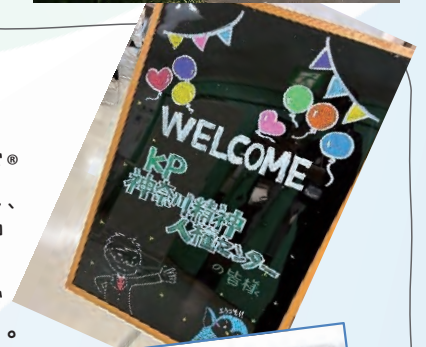
街からは離れた場所で、地域移行が難しく長期療養されている患者さん、身体合併症のある患者さんが、たくさんおられる現状があります。彼らが今を、これからをどんなふうにご過ごせたらいいか、どうケアしていったらいいか、精神的・身体的なリハビリを続けるスタッフの方々の孤軍奮闘の様子がうかがえました。こうしたことは、私たちも知って、地域や福祉・行政、市民も一緒に考えていかねばならないことではないか、と感じた視察でした。
(三瓶)

③ 医療法人社団元気会横浜病院

基本情報	
住所	226-0013 横浜市緑区寺山町729
電話	045-933-1011
病床数	326床
病棟科病棟・病床数	認知症治療病棟 (50床) 医療療養病棟 (220床) 介護医療院 (56床)
アクセス	JR横浜線 中山駅または相鉄線 鶴ヶ峰駅よりバス

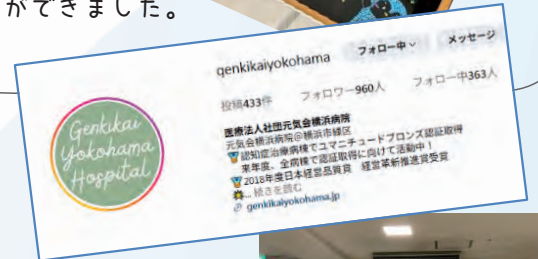


当日は、それぞれの病棟の師長さんにご案内いただきました。また、ユマニチュード®インストラクターの井上さん、藤枝師長、平看護部長、認知症ケアチームの大塚さん、そして北島院長、吉田先生にお話しを伺うことができました。



【ホームページ】

ホームページでは、病院の概要、外来や入院についての情報が公開されている。スタッフ募集についての情報も多く掲載されている。また、インスタグラムやフェイスブックに力を入れていて、日々の取り組みやイベントなどが投稿されている。公式ラインもあり、求職者が採用担当者に直接質問できる。



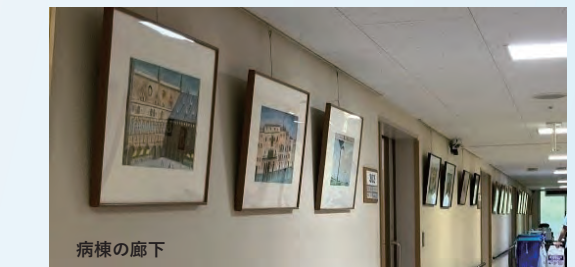
【病棟】

建物自体は、歴史を重ねているが、清潔感がある。また、廊下には、絵画やお花が飾られており温かみを感じられた。玄関横には他病院にある一般的な「医事課」ではなく「お世話課」と呼ばれる部署がある。

病棟には各病棟ごとに職員の顔写真と名前が掲示されていた。医療療養病棟では、認知症の患者様に対するケアの工夫や取り組みが紹介されていた。また、病棟内は10月に開催された秋祭りに合わせて、お祭りの飾りつけがされていた。なお、見学した時間帯は廊下やデイルームで患者さんをお見かけすることはなかったが、病棟のベッド上でクラシック音楽を聴いている様子が見えた。



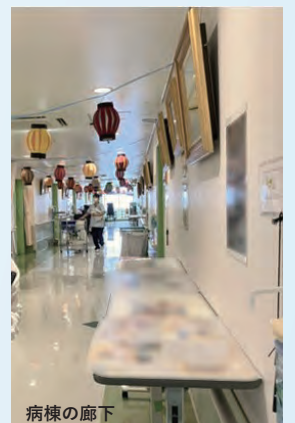
病棟の入口



病棟の廊下



廊下には様々な飾り付け



病棟の廊下



【デイルームなど】

デイルームには、写真や絵やお祭りの飾り付けがされていた。認知症医療病棟ではデイルームの奥に面会室があり、ご家族と面会をされている様子が見られた。食事のメニューのほかにおやつメニューも掲示されていた。

モジュラー型車いすを導入されているとのこと、病棟廊下に置かれていた。

【病室】

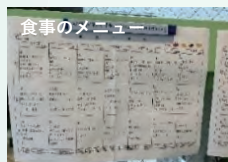
4人部屋がメインになっている。カーテンで仕切られている。外から見ると紫色に見えたガラス窓は、外部からの視線防止のためのフィルムが貼られているとのことだった。病室の窓は大きい。

ベッドには手元灯、ナースコールなどがあり、引き出し収納が設置されていた。

また、患者さんひとりひとりの枕元には「好きなこと」が掲示されている。患者さんの多くはリースの病衣を着ている。



“ノックを!”の表示



病棟廊下

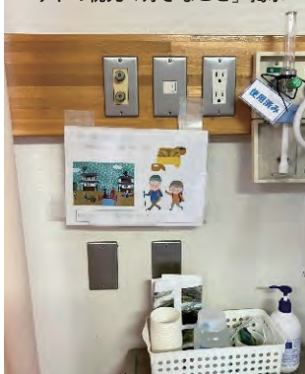


デイルーム



モジュラー型車いす

ベッドの枕元「好きなこと」掲示



超低床ベッド



病室の様子 (外が眺められる)

【トイレ、浴室】

トイレは病棟の中央部にある。浴室内に浴槽が2つあり、個別で入浴できる。



浴室の様子



浴室



トイレ



【面会】

面会は、ホール奥の面会室でできるとのこと。時間帯は、13:30~17:00で、1回1時間まで、人数は5人までとのことだった。ご家族との関係を大切にされているのだと感じた。

【公衆電話】

認知症病棟には、ナースステーションに面して、カード専用タイプの公衆電話がおかれていた。

【そのほか】

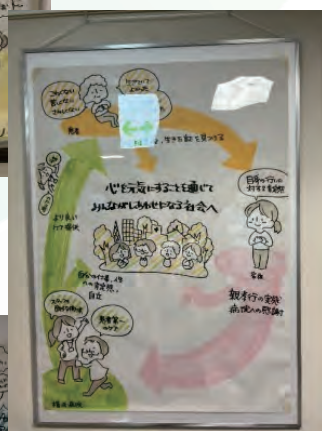
・理念のこと：「心を元気にする～医療・介護を通じてみんながしあわせになる社会をつくります～」を理念としている。この理念のもとで「患者様の人生を最期まで輝かせる」ことを目指し、患者様が「こわくなくくるしくなくさびしくなく」「生きていてよかった」と感じていただける医療介護の提供を目指している。

・介護開発室：介護職のための教育部署で、職員への理念浸透や、ケアの質向上のため2010年に設立された。介護開発室の研修生の気づきが、身体拘束廃止を目指すきっかけにもなった。介護職は有資格でなくても従事できることから、入職後1～2ヶ月間研修を行っている。

・身体拘束廃止機関：2011年の身体拘束廃止宣言に合わせて設置され、多職種によって構成されている。2016年9月に身体拘束廃止を実現し、その役目を終えた。

・ユマニチュード®ケア：ケアを通して患者様との関係性を構築し「人間らしくある」「その人らしさを尊重する」を大切にしたいケアの哲学、技術のひとつ。認知症治療病棟は2024年にユマニチュード®学会のブロンズ認証を受けている。

・ライフレビューブック：“患者様の人生の歴史を知ること”を大事にし、一人ひとりの患者様やご家族様に聞き取りを行い、写真や資料を集め、レビューブックを作成。ケアにも役立てられている。



介護開発室の廊下に掲示されている理念のボードなど

【北島先生をはじめ、スタッフのみなさんとの座談会で】



2025年3月、大熊由紀子さんにお声掛けいただき、県内で身体拘束ゼロの取り組みをしている病院に視察するとのごことで、元気会横浜病院の理事長（院長）北島明佳先生に初めてお会いしました。北島先生は2025年に発足した『ケアする病院ネットワーク』にも発起人として参加されていたことを報道で知り、関心を寄せていました。その後、KPとしても視察をお願いできないか相談し、今回の訪問が叶いました。

当日は、医療療養病棟と認知症治療病棟の見学後、北島先生からお話を伺い、吉田先生、看護師の藤枝さん、山田さん、井上さんらスタッフの方々と座談会を開いていただき意見交換をしました。

介護開発室や身体拘束廃止委員会の発足以降の身体拘束ゼロまでの取り組みやあゆみ、病院の理念、組織作り、ユマニチュード®の実際、高齢の方のケアについてなど、質疑応答を交えつつ詳しくお話を聴かせていただきました。

スタッフのみなさんと対話することで、病院の取り組みや大変さも伺いつつ、私たちKP（市民）の要望や期待もお伝えし双方向のやりとりができました。

神奈川県立四季の森公園に隣接するこちらの病院に私達が到着すると、正面玄関のある1号館内の医療療養病棟の一部フロアの見学から始まり、次に、渡り廊下で繋がっている、認知症治療病棟のある2号館の一部フロアを見学。最後に1号館1階の一室で、スライドを使った北島院長からの病院紹介と、これまでの取り組みの説明等を受けた。そのあと院長と、同席した数名の職員の皆さんと私達との意見交換を経て、約2時間の予定が終了した。

この意見交換をした部屋には、手描きのイラストや文字で歓迎するウェルカムボードが置かれ、私達を好意的に受け入れてくださろうとする様子が伝わってきた。

そんな中、印象に残ったことのひとつは、この部屋での時間、院長の隣に座っていらした、入職当時は非常勤の看護師として身体拘束解除の導入期に直面し、変化を目の当たりにし、現在は身体拘束ゼロ委員会委員長でもある、看護部の藤枝看護師長の姿だった。

身体拘束解除のため院長が旗を振り、病院内に新たな理念と取り組みを浸透させていく過程を、長きにわたり体感してこられた看護師長には、現在進行形の苦悩と希望が共存しつつ、誠実に患者と接してこられたであろう、あたたかな眼差しがあった。こうした方が一人でもいらっしゃる病院が身近な場所にあることを知ることができ、私は嬉しく感じると共に、少しの安堵を覚えた。(小林)

私たちが病院の前に到着した際、病棟間を行き来していたスタッフの皆さんが、丁寧にお辞儀をされていたことが印象的で、接遇が行き届いていると感じました。

その後、北島理事長・院長先生をはじめ、多くのスタッフの方々から説明を受けながら院内を見学しましたが、外部を受け入れることに慣れていらっしゃる様子が伝わってきました。限られた時間の中での見学でしたので、その場でじっくりと滞在することはできませんでしたが、その分、ポイントを絞った説明をいただくことができました。

身体拘束については、ゼロを目指して他施設の見学や「身体拘束廃止機関」「介護開発室」の設置、モジュラー型車いすや超低床ベッドの導入など、混迷期・転換期を経ながら10年かけて拘束ゼロを達成されたとのことでした。

当初は「拘束を外すこと」が目的化していたことに気づき、「どうすれば患者さんが穏やかに過ごせるか」を考え続けたことで、多くのアイデアが生まれ、それが文化として根付いたというお話には、素直に心が動かされました。一方で、経営品質など経営面もしっかり考えていらっしゃることで、それが経営的安定につながっているという点を伺い、少し冷静にもなりました。拘束ゼロは大変すばらしい取り組みですが、同時に「拘束を外された患者さんは日々どのように過ごされているのか」という生活の質(QOL)が気になり始めました。

ユマニチュード担当の方に質問しましたが、明確な答えを得られたかどうかは少しあいまいで、北島理事長・院長先生が意図を汲んでフォローしてくださいました。これは今後の課題のひとつになると感じました。ユマニチュードを実践する上で、ケアの質の向上に加えて、患者さんの日々の生活の質(QOL)をより深く取り入れていくことができれば、さらに魅力的で素敵なお病院になると感じました。

(奥原)

「身体拘束を解除できないと思い込んでいる、私たち医療従事者の思考が、身体拘束解除の大きな壁」との北島先生の言葉が、重く響きました。課題解決モデルや医療安全、ケアする側のしやすさなどが重んじられがちな現場で、「患者中心」「その人を見る」ケア、「身体拘束の廃止」は、口で言うほど簡単ではありません。

元気会横浜病院が、ほぼ全員が身体拘束や安全ベルトを使用していた2011年当時の状況から、数年かけて身体拘束を廃止するまでの過程では、特にスタッフに理念を教育・浸透し、文化(風土)にしていくには、いろいろな工夫や葛藤もあったのであろうではないか、と伺えました。そうしたマインドセットしていくには、やはり“トップ”の意志や思想が重要であると感じるとともに、日本が民間病院に低い診療報酬や人員配置で精神医療を任せ、人の行動を制限する処遇が病院(医師)ごとの指針や判断に委ねられている現状にも憂いました。元気会横浜病院の取り組みが、「身体拘束のない精神医療」「認知症のケア」のモデルの一つとして法制度に活かされ、より普及していくといいな、と感じました。

さらに関心を持った点として、訪問診療や訪問看護ステーションの展開です。病院での長期療養や看取りが多かった状況から、近年は徐々に在宅等への退院も増えていると伺いました。「ユマニチュードのケアを在宅でも受けたい」「地域で最期を迎えていく」というニーズにも応えていくと伺い、これからの高齢者医療や認知症ケアがどうなっていくのだろうかという心配(2024年度訪問記vol.2座談会参照)に、希望がもてた気持ちになりました。

家族が、わたしが認知症になったら、どんなふうにも最期をすごすだろう、そんなことを考えた視察でした。(三瓶)

身体拘束0の取り組みに興味があり、見学したいと思っていました。自分自身や家族が高齢になり、医療のケアが必要になった時に選択肢の一つとして入院するかもしれないと考え、北島院長をはじめスタッフの方たちが説明くださったユマニチュードや個別支援の理念と実践がぐっと自分事に感じられます。緊張感とやさしさの調和が感じられる病棟には、スタッフ全員の紹介が顔写真付きで掲示されていることが印象的で、顔の見える関係性を大切にしていることが感じられました。身体拘束0の次はスピーチロックをどう減らしていくかなど、常に次の課題に向けた取り組みを続けているのですね。それらの取り組みが今後どのように展開されていくのかについても知りたいと思いました。(堀合)

病棟の雰囲気、スタッフが患者の方を思って用意された様々の工夫、受付に飾られた薔薇の花や作家による絵画、窓からの風景や自然光、余計な雑音のないホール、そして働くスタッフの紹介が、きちんと撮影された写真を配置して見やすく掲示されていること。

車椅子の選択、服薬の整理などにより患者の方をエンパワメントする医療体制。見学させていただいた以上のようなことから、療養される患者の方や、現場でケアに関わっているスタッフの方への気遣いや強い思いが伝わってきました。病院全体が「人の尊厳」を大事にされていることをリスペクトいたします。

北島院長の理念と拘束ゼロの挑戦は、事前に見せていただいた資料を通じて私なりに知見を得ていましたが、見学を通じ、「自らが尊重されることで、相手と触れ合う時にも、その相手を人として尊重できる」ということを実感しました。個人的なことになってしまいますが、ケアに関わる私自身、とても良い学びを得ることができたことに感謝いたします。

この「人として尊重されること」「尊厳」という観点から、さらに指針をいただきたく、改めて質問させていただきたいと思います。

①暴言や暴力のあった患者の方が得意の料理を披露することで、笑顔を取り戻すビデオを見せていただきました。その人に寄り添う貴重な実践の例として心を揺さぶられました。が、冒頭でスタッフに手が出てしまうシーンが写っています。患者の方が「こわくない」医療やケアに辿り着くまでには、スタッフの側もこわい思いや傷つく経験をされるのが、避けられない過程としてあると思います。このようなスタッフへのケアはどのように実施されていらっしゃるのでしょうか。

この事は、KPで電話ボランティアとして活動させていただく際、電話口で暴言や品位のない話題をふられた時に、どのように対処していけばよいのか、という課題の解決にも繋がります。

②尊重されることで拘束が外れた患者の方が、次のステップとして、他の患者の方と人として繋がっていった事例はありますか？「陰性症状の人の力を引き出す」というご説明をいただきましたが、生活する上で、できなくなってしまったことをご自分でできるようになることと同等に、他の患者の方への配慮や思いやりを持てるようになることも、また、「力」だと思えます。拘束ゼロから次のステップへの希望となる事例がありましたら、ご紹介いただきたいと思います。

病院での実践を見学させていただき、必ずしも余裕や社会的な理解が充分にあるとは申しにくい日本の病院経営体制の中で、並々ならぬ努力をされ、笑顔で実践されていることを実感できました。やればできるのだ、という北島院長の強い思いとスタッフの皆様のご尽力は、拘束ゼロを実践する病院の先駆けとして、より良い医療体制を築く牽引力となります。

さらに、理念を実践してゆく上では大変なご苦労もあると推察いたしますが、それをチームでフォローし笑顔で対処されていることに希望をいただきました。(矢崎)

< 看護師の藤枝さんから回答をいただきました。 >

【質問1】へは、身体拘束廃止委員会での認知症ケア専門士を中心としたチームの取り組みについて、勉強会の開催や、臨床心理士もファシリテーターに交えたグループワーク「ホンネ会」を開催することで、職員の気持ちや辛さも話し、傾聴しあうことで辛さやストレスを軽減する取り組み、そしてユマニチュードの哲学に基づいたケアについて、詳細に教えていただきました。

【質問2】については、患者さんの好きなことを取り入れた様々なメニューの作業療法や趣味活動のサポートをする『院内デイ』について、事例や写真なども交えてご回答いただきました。

藤枝さん、スタッフの皆様、ありがとうございました。ひきつづき、対話を続けていけたらと思っています。

④ 医療法人財団青山会みくるべ病院

基本情報

住所	259-1335 秦野市三廻部948
電話	0463-88-0266
病床数	276床
病棟科病棟・病床数	救急急性期病棟（54床）精神療養病棟（60床） 一般病棟15：1（3病棟：160床）
アクセス	小田急線渋沢駅より 送迎バス10分



当日は、それぞれの病棟の師長さん、そして中田看護部長に案内していただきました。また、午後は家族会に参加させていただきました。そのあと、岡崎院長先生にもお話を伺いました。

【ホームページ】

岡崎院長の優しい笑顔が目飛び込んでくる。外来のこと、入院のこと、アクセスなどがわかりやすくまとめられている。とくに依存症の治療については、治療の特徴や家族会の情報や意義なども書かれていて、病院の想いが伝わってくる。

【外来など】

訪問当日は土曜日。外来の待合室は座る場所がないほどに混んでいた。久しぶりに受診の方や定期的に通院している方、20代から70代くらいの方まで、ご夫妻で来られている方や支援者と来ている方など様々な方が来られていました。スタッフの方が柔らかな表情で親切に対応されている様子が見られました。作業療法の作品が飾られていたり、依存症についてのパンフレットがおかれています。

【病棟】

3つの種類の病棟があり、それぞれ特徴がある。建物は築年数は古いですが、清潔に保つ工夫をされている。

広さも充実していて、外の緑がよく見え、明るく心地よい病棟。スタッフの皆さんが明るく挨拶して下さることも心地よかった。

病棟の真ん中にナースステーションがあり、その横に観察が必要な患者さんの部屋がある。ホールには、テレビがあり、訪問当日は、野球の中継があり沢山の観客が観ていた。

手作りのカレンダーも飾られていた。また、患者さんはみなさんご自分の洋服を着られている。



ホール（外のみどりがきれい）



病棟の廊下



【ホールなど】

大きな窓があり明るい。雑誌や新聞の棚があり自由に読むことができる。

また、給茶機やドリンクの自販機がおかれている。急性期の病棟には、吸引機も置かれていた。

ご意見箱が設置されていて、患者さんの意見や要望に対応されている。

売店への買い物をスタッフに依頼することができて、注文用紙がおかれていた。

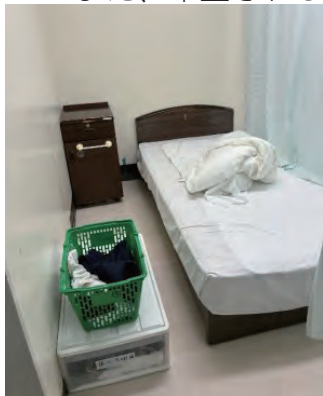
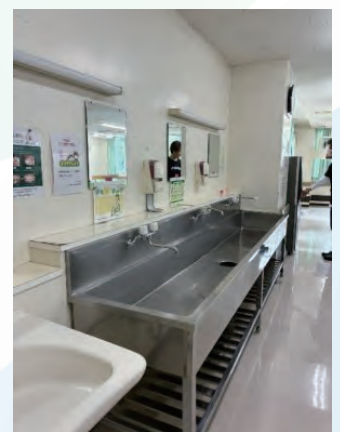
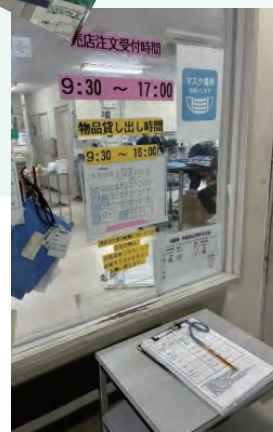
手紙を送るのに必要な切手も販売されている。

食事のメニューも掲示されている。10月のイベント食は、ハロウィンメニューでかぼちゃのプリンが予定されていた。

【病室】

4人部屋と個室がある。ひとつの病棟では、個室が50室ある。ポータブルトイレも用意され、必要に応じ設置されている。鍵付きの引き出しとロッカーがおかれている。洋服などが多い方は、収納ケースで対応されている。転倒の危険のある方にはマットが敷かれている。

また、希望される方にはテレビも設置されている。



【浴室】

一度に4人くらいが入浴できる大浴場。秦野の山並みが見える大きな窓があり、清潔感もある。週2回くらいの入浴。



【洗濯機】

コイン式の洗濯機と乾燥機が設置されている。女性の部屋には物干しも用意されている。



【トイレ】

男女別にトイレがある。清潔感がある。



【公衆電話】

救急急性期の病棟では、ガラスで仕切られた電話ブースがあった。そのほかの病棟は、ホールに置かれている。



ガラスで仕切られた公衆電話

【保護室】

窓も大きく、木質系であたたかみのある保護室。床にマットが敷かれている。ナースコールもあり、天井にカメラが設置されている。

トイレは少し奥まったところにあり、洋式。



あたたかみのある保護室

【売店】

南病棟の1階にある。患者さんから注文を受けたスタッフが購入することが多い。お菓子や飲み物、封筒などの文房具などがおかれている。

【面会室】

病棟内に面会室がある。面会は予約制で時間制限は特にもうけられていない。



面会室



売店



【そのほか】

・携帯電話

携帯電話の使用は原則認められていないとのこと。個人情報の点などから難しいとのこと。

・喫煙について

病院内で喫煙は認められていない。

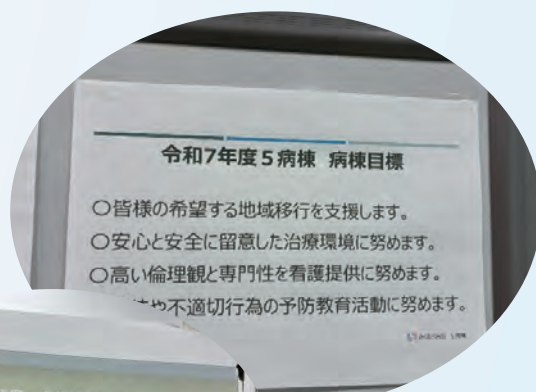
・虐待防止について

虐待予防川柳が募集され、作品がナースステーションに掲示されていた。療養病棟の看護師長の提案ではじまったとのこと。岡崎院長のコメントも掲示されていた。

また、患者さんへの声掛けについても心がけがなされている。

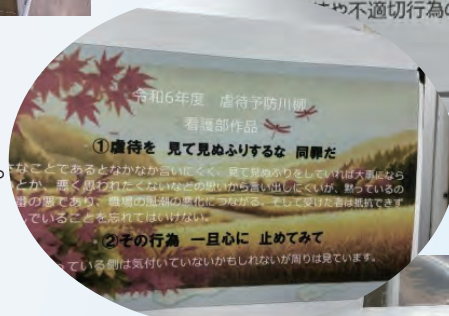
【家族会】

家族会が毎月開催されている。訪問当日は、会場には20数人の方が参加されて、オンラインの参加の方もおられ、活発な対話がされていた。



令和7年度5病棟 病棟目標

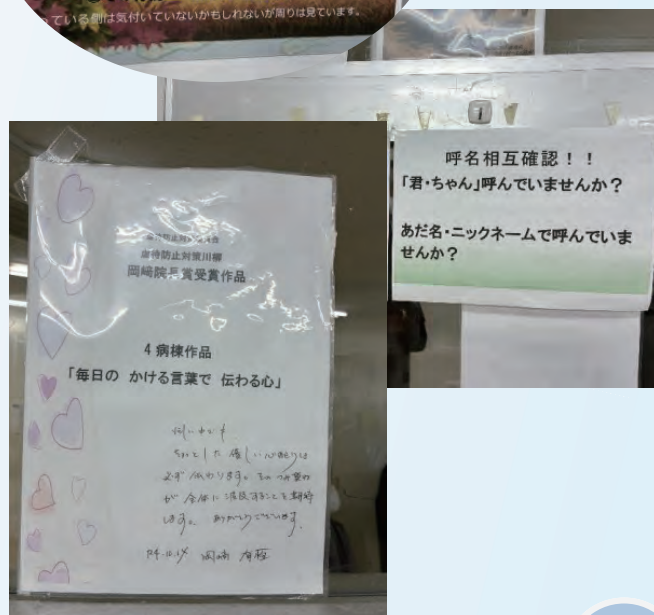
- 皆様の希望する地域移行を支援します。
- 安心と安全に留意した治療環境に努めます。
- 高い倫理観と専門性を看護提供に努めます。
- 不適切行為の予防教育活動に努めます。



令和6年度 虐待予防川柳

看護部作品

- ①虐待を 見て見ぬふりするな 同僚だ
おんなよとあるとなかなか言いにくい。見て見ぬふりをしていけば大抵はやらぬが、早く思わなければならないので思いがけい出しにくい。黙っているのが目撃であり、職場の風潮の悪化につながる。そして受けた者は黙らざるを得ないことを忘れてはいけない。
- ②その行為 一旦心に 止めてみて
している前は気付いていないかもしれないが周りは見えています。



呼名相互確認！！

「君・ちゃん」呼んでいませんか？
あだ名・ニックネームで呼んでいませんか？



みくるべ病院では依存症の家族会に同席させていただきました。私自身は普段、地域や病院 家族会に参加していますが、統合失調症や双極性障害の家族が多数を占める一般的な家族会では、参加者は家族に限られ、当事者は参加できないという所が一般的です。ここの依存症の家族会は、同じ家族でも、今入院中の人、これから入院させようという人がいる他、寛解に至った当事者や闘病中の人、さらには「自分は依存症ではないが、家族に言われて参加した」という人までバラエティに富んでいました。このため話の内容も、当事者から家族へのアドバイスがあったり、家族同士はもちろん、当事者同士が相談し合ったりと、多角的に話が進む印象を受けました。統合失調症などの場合、当事者のいわゆる「病識」がはっきりしないことなど、難しい問題もあるかも知れませんが、同じ立場の人だけが集まっても、話が発展しないという傾向があり、この家族会のような多角的な対話の試みも必要ではないかと気付かされました。(稲川)

小田急線渋谷駅から車で15分ほど登った自然を感じる場所にある「みくるべ病院」は設立から30年の神奈川県西部の依存症専門医療機関でもある精神科病床のみの病院である。

10月下旬、土曜日の訪問であったが、各病棟を案内していただいた看護師の方々には、午前、午後と忙しい中、とても親切に対応していただいた。(皆さまありがとうございます)。

全体的に看護師やスタッフの皆さんは熟練度の高い方が多い印象で、正直、病院全体のレイアウトや動線が良いとは言えない中、患者がなるべくストレスなく過ごせるようにフレンドリーな雰囲気を作り出せているように感じた。ただ、「携帯電話」「スマートフォン」の取り扱いや制限は、「依存症」患者への対応が懸念とはいえ、現在の「流れ」を鑑みても検討の余地はあると思う。

「公衆電話」も「あること」を前提とするのではなく「使用する」を基本に、設置の仕方を検討していただきたい。

当日は依存症の当事者および家族のグループミーティングにもお邪魔させていただいたのだが、退院後の方も参加されていて信頼度がうかがえる。

同じ小グループにいらしたアルコール依存症で入院されていた方にお話を伺ったのだが、「みくるべ病院」はとても厳しく(「依存症」で医療保護入院の割合が他の病院より大きいような?)、「惨めな気持ちになり、絶対止めようという気持ちになった」とおっしゃっていたのが印象的だった(いささかスパルタ的な感じなのか?)。時間の関係で叶わなかったが、「依存症」患者にミーティング以外にどのような治療がおこなわれているのか質問したかった。処方薬の選択と期間など。

また、依存症治療は「継続」が最重要であるので、退院後のフォローの方法などもより詳しく訊いてみたかった。依存症は「三度の飯よりミーティング」と言われているように、本当にミーティングが大切であり、その点は充実したメニューが揃っていると思う。併し、ミーティング終了後、もう少し込み入った取材をしたかったのが時間の関係で残念であった。現在、海外ではミーティングのスタイルもアップデートされていて、ミーティングのやり方やアプローチの方法を検証することも含め、日本の「依存症からの回復」への取り組みを、より現実的なものにするために、医療サイド、研究者だけでなく、当事者や元当事者を含む様々なアングルの「対話」が求められている。

今回の病院訪問に際して「みくるべ病院」の対応に感謝したい。そして、毎度ではあるが、こちらの病院訪問での取材の「時間」と「深度」を検証することもやはり必要であると思った(反省を込めて)。(平井)

ここ数年で、いくつかの病院を見学してきました。訪問の際、スタッフの方々とお話しすると、それぞれに工夫されていることがあって、そして同時に悩まれていることもあって…そうした姿を垣間見るほど、「では結局、どんな病院が“良い病院”と言えるのだろうか?」と、だんだんわからなくなってきました。それで、自分が入院するとしたらどう感じるのか、ふと考えてみたんです。

入院ってどういうことだろう、と。すると、「入院とは、いつもの暮らしからいろいろなものが切り離されることなんだ」と気がつきました。いつもコーヒーを飲んでいるマグカップ、毎日寝ている布団、部屋から見える景色…。そうした“自分の日常”から離れること。

そう思ったとき、入院しても、自分のいちばん近いところだけは、自分で選んだものに包まれていたいと感じました。それは、身につけるもの。寝るときは、少しくたっとした綿のパジャマがいい。寒ければ、好きな色のカーディガンを羽織りたい。そんな小さなこだわりは、入院中でも続けたいと思うのです。

みくるべ病院さんでは、患者さんがそれぞれ自分の洋服を身につけておられました。その姿は、どこか「私はここにいるよ」とさりげなく主張しているようにも見えました。

そして、自分らしい服を着ていた患者さんのひとりが、にこっと笑って「ぼくの写真を撮って!」と、ピースサインをしてくれたのです。もしかしたら それは「いい病院」のひとつの指標かもしれないと感じた訪問でした。(矢ヶ崎)

<みくるべ病院 岡崎院長先生から>

当院は困っている人を助ける親切な精神科病院であり続けることを追求してまいります。

病院側の都合は二の次にして、症状の重たい方、処遇の難しい方にも勇気をもって、あきらめずに関わる姿勢を大切に、「みくるべ病院は力になってくれた。」と地域から言ってもらえることが最大の喜びです。

当院で、本当の親切に触れ「世の中捨てたもんじゃない」「もう少し生きてみよう」と生きる希望を持ってもらい、その輪が少しずつでも社会に広がる夢を持っています。

親切にされた人は、他者にも親切にすると信じてこれからも精進してまいりますので、皆様のご指導をお願いいたたく存じます。

岡崎有恆



岡崎先生に初めてお会いしたのは、病院訪問についてご説明した、あの暑い夏の日でした。そのとき会話の中で心に残った言葉が「親切」でした。

面談の折、先生からは「冊子にはマイナスなことは書いてほしくない。それは院長として、この大切な病院を守らなければならないからなんだ」「気が付いたことがあったら直接伝えてほしい」と言われました。

私は、とても迷いました。KPとしては「もし自分や家族が通院・入院したとしたらどう感じるか」という視点で、見えたこと、感じたことをまとめたかと思っていたからです。

でも、ふと考えました。

もし感じたことをそのまま書くことで、読んだ誰かが苦しい気持ちになるのなら・・・

また、せっかく訪問を受けてくださった病院の方が「KPの訪問なんて受けなければよかった」と感じてしまうのなら……それは本意ではない、と。

ぐずぐずと考え続け、結論が出ないまま迎えた10月の訪問。

そして、もみじがきれいに色づいた12月、まとめた原稿をご確認いただくために3回目の訪問をしました。

先生は原稿を見て、すぐに「(このままで) いいですよ」とひと言。さらに「いつでも気軽に連絡してね。」とも言ってくださいました。

思えば、KPはまだできて5年の、本当に小さな団体です。そんな私たちの訪問を、お忙しい中にもかかわらず受け入れてくださったことに、改めて感謝の気持ちが湧いてきました。

もう一度「先生の言う『親切』って、どういうことですか?」とお聞きすると、

「目の前の人に勇気をもってかかわること」と教えてくださいました。

こんな小さな団体の私たちにも、先生は勇気をもって関わってくださったんだな、としみじみ感じました。

帰り際、外来の受付に来ていたご家族の方に

「あー、こんにちは! どうだった〜?」と気さくに声をかけてお話しされていた岡崎先生。

その姿を見て、これこそが先生の体現している「親切」なのだなあ、と感じながら病院を後にしました。

KPの活動も「勇気をもってかかわっていきたい」と心に刻みました・・・(矢ヶ崎)

【参考】（大阪府）医療法人和気会新生会病院】



KPの活動を応援してくれている、大阪の新生会病院の和気隆三先生。さわやかな風が心地よい春の陽気の4月に訪問しました。



和気先生に「何も言わずに一人で病院の中に入ってみたらいい。中庭に集合しよう」と提案され、一人で病院内に入らせていただきました。受付の職員さんたちが、ニコニコ「こんにちは」と声をかけてくださいました。そのまま病院の中をウロウロ歩きながら、すれ違うスタッフさんや患者さんと「こんにちは～」と言葉を交わしました。「どなたですか」「受付は済ませましたか」などの言葉は、誰からもかけられませんでした。この病院は自由に人が出入りしていて、みんなが温かく迎えてくれる文化があるのですね。

中庭の隅には、喫煙所としてのベンチが設置してありました。タバコを吸いながら雑談をしている人たち何人かいました。中に、面会に来たご家族らしき人と話している人がいました。家族が会いに来てくれた時に、一緒にこの庭をみながらゆっくり話せたら素敵だと思いました。KPとして、たくさんの精神科病院に訪問していますが、多くの病院が面会時間に制限をもうけています。家族が自由に出入りできて、思う存分面会することができることは、とても重要だと感じました。（濱田）

「医療のソト」

和気先生はおっしゃる。

『医療だけではまかなえない。医療のソトに大事なことがある。医療だけでは、こころの病は治せない。人とのかかわり、食事、自然や環境。今の精神医療は、あまりにも人の食事や療養環境に無関心になっていないか。』

依存症は、特に「閉ざされたところ」「自由を失う、うばわれる病」であり、そんな心を鉄柵や鍵のかかるところに閉じ込めて、「さて、鉄柵のむこう（社会復帰）を目指すにはどうしようか」というような仕方の治療は、違うと思う。

人が作り出す「やわらかい関係」、土のうえを踏むという当たり前の行為、自然や緑とのふれあいや癒し、おいしい食事、そうした「医療ではまかなえないもの＝医療のソト」のものが、人を癒すのであって、患者さんの閉ざされた気持ちがやわらぐ。人、自然、相互に働きかけるものがあるのだと。（三瓶）



2024年度は9つの病院を訪問し、その内容を「訪問記」として冊子にまとめ、先生にもご覧いただきました。

その際にいただいた感想の中で、印象に残った言葉があります。

「北風と太陽ってあるでしょう。KPは太陽だなあ～、〇〇は北風や…」と。この言葉が、これからのKPの活動の方向性を考えるきっかけになりました。童話『北風と太陽』では、北風が強い風で旅人の上着を吹き飛ばそうとしますが、太陽はあたたかな光で旅人が自ら上着を脱ぐようにします。

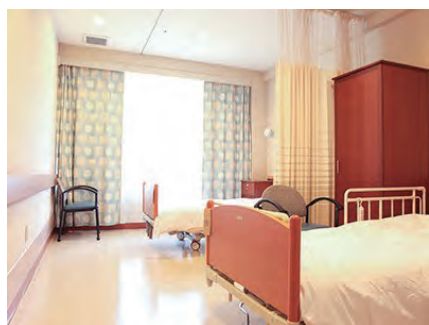
いまの精神医療や精神科病院に何か課題があるとしても、私たちKPは“太陽のように”あたたかく照らしながら、変化を生み出していける活動をしたいと感じています。

ただ、「どんな太陽でありたいのか」については、みんな考えていきたい。ギラギラとした強い太陽を思い描く人もいれば、おだやかな春の日差しのような太陽をイメージする人もいるでしょう。

どんな形であっても、旅人が自ら感じ取り、自然に変わっていけるような、そんなあたたかい支え方をしていきたいと感じました。（矢ヶ崎）



【参考】（東京都）医療法人社団新新会多摩あおば病院】



今回の訪問のきっかけは、KPが5月に開催した「病院訪問報告会」に相談室の松原玲子さんが参加してくださり、「多摩あおば病院も見学してみますか？」と声をかけていただいたことでした。

「ぜひ見学したいです！」と即答し、神奈川県内の病院訪問を終えた11月27日、KPメンバー5人で伺いました。

外来、作業療法室をはじめ、4つの病棟を見学させていただきました。見学後には、中島直さん（理事長・院長）、生島直人さん（企画室室長）、松岡晴香さん（看護部長）、関千尋さん（医療社会部長）、松原玲子さん（相談室）と、見学で感じたことや質問をお伝えしつつ、病院としての考え方や大切にしている思いを伺う時間をいただきました。

さらに、今年度KPで冊子化を目指している「神奈川630データブック」についても話題にのぼり、協力していただけることになりました。本当にありがとうございました。こうやって 人と人がつながっていくことの大切さを実感しました。

【多摩あおば病院の概要】

『地域精神医療の拠点として』

多摩あおば病院は、東京都東村山市にあり、半径12km（およそ人口96万人エリア）の精神医療を支える急性期を中心とした精神科単科病院です。

ホームページやパンフレットには、中島直院長のメッセージとして“**私たちは、精神医療が歴史的に請け負われてきた長期入院（収容）のみに偏った役割を返上する使命を自覚して、それを変革していきます。その変革を表す概念が「地域精神医療」です。私たちの病院は、その拠点となることを目指します。**”とあります。

<特徴>

急性期型の病院。2024年度の入院患者数は1002名。そのうち初回入院率が47.7%。

入院者の99%が1年以内に退院する。平均在院日数は70日です。100床あたりの常勤医師数は11.2名（医療施設調査によると、精神科病院全体の平均は3.1名です）看護師や精神保健福祉士などのコメディカル職の配置も、全国比より多いです。

<病棟>

- ・精神科救急急性期病棟 60床
- ・回復期（15:1）病棟 56床
- ・急性期治療病棟 49床
- ・児童・思春期精神科入院病棟 39床

今回の訪問で印象にのこったところ・・・。



各居室ごとの入口に、洗面化粧台とトイレが設置されているのが特徴。
レンガやタイル調の、カラフルで明るい雰囲気の病棟。



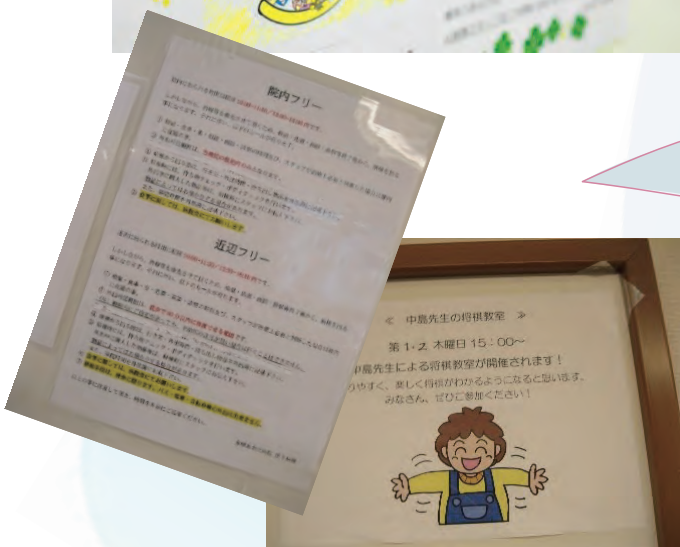
<児童・思春期病棟>
児童らはホールや自習室で思い思いに過ごしている。
2022年より稼働。
院内学級『風の学校』（小平特別支援学校より教員訪問）がある。病棟に職員室や学習室がある。
治療共同体という考え方を尊重し、病棟での運用や決めごと（例えばテレビの視聴にまつることなど）は、子どもたちも交えた「子ども会議」で決められる。



<ホームページ>
病院の概要だけでなく、統計資料として、「入退院数」や「平均在院日数」「退院先」「外来患者数」などの情報が掲載されている
<パンフレット>
淡い色調の三つ折りパンフレットは、診療内容や取り組みが具体的、かつ分かりやすく記されている。



<りらく>
ピアサポートグループ「立川りらく」のメンバーが病院に来院し入院している方々と話し合いをして交流する、退院支援の取り組みのひとつ。2004年から続いている。視察当日も、行われていた。



各病棟の掲示板にはさまざまな掲示がされていた。
外出のルール「院内フリー」と「近辺フリー」があった。
また、毎月行われている「中島先生の将棋教室」の案内も貼られていた。

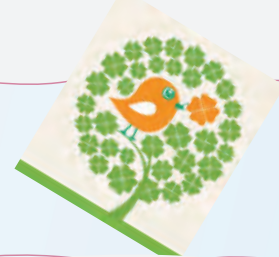


患者さん用の喫煙場所。コロナ禍の時に、一人一人が喫煙できるように仕切りが作られている。



子ども専用の思春期病棟は、この病院の特色の1つで、親の虐待やネグレクトなどの事情で、児童相談所などで保護した子供が戻るところがないと、病院の思春期病棟で入院して、院内学級などに通いながら過ごしたりすることも多いと伺った。精神科医は、すべて常勤で、また、精神保健福祉士も21人も在籍していて、きめ細かな医療が提供されている。また、99パーセントが、1年以内に退院するとのことで、慢性期病棟や認知症病棟がなく、病院内も清潔感もあり、患者の方々が生き生きしているイメージを受けた。また、病棟はコンパクトで、患者の側にたっているいろいろ考えてあげていて、入院していてとても過ごしやすい病院だと思った。電話は、ナースステーションで預かっていて、公衆電話からかけることで、外部からの刺激をなるべく遮断して、急性期から落ちついていくことなど、よく考えて治療ができるように考えているのだと感じた。(池畑)

多摩あおば病院は外部へのデータ開示を大切にしていた。データを開示するだけでなく、開示は「何が良い指標」か常に考え提示すべきというお考えで、常に良き医療提供するための病院のシステム作りとの両輪を軸にして病院を経営していると中島院長や職員の方にご説明頂いた。だからこそ1年で多くの方が退院しており、データを開示することによって病院として「退院を促進していく経営方針」に舵を取って行くその姿勢に感銘を受け、まさにKPが取り組んでいる活動も病院実績との数字を把握することであるから、病院と外部がともに同じ方向に進むための交流ができとても意義深い1日でした。また地域との繋がり作りとして、年に1度のお祭りをされているとのこと。「ぜひ地域の方に来てもらいたい」と地域共生を実践されていた点もYPSがピア祭に取り組んでいるので1度足を運んでみたいと思いました。(中村)



児童思春期病棟では、子どもたちの主体性を尊重した取り組みとして「こども会議」が開催され、自主性を育む環境づくりが進められている。会議では毎回議題が提示され、例えばテレビ視聴時間などのルールづくりが子ども達によって決められる。また、お悩み相談室の設置もあるが、30分座っていられる子に限定されている点は支援が届きにくい子が出るのではと気になった。

患者には自傷傾向を持つ子も多いためナースコールは必要な子のみ設置されているが、コード式ではない安全なタイプに変更して全員が利用できるようにする方が親切かと感じた。隔離室には旧タイプと新タイプの部屋があり、環境整備が進められていることが伺えとてもよかった。(提水流)

“変えるべきところは変え、守るべきところはしっかり守る”という姿勢を強く感じました。

KPの活動にとっても、そして私自身にとっても大きな学びになりました。

できれば、もっと時間をかけて病棟を訪問してみたい…そんな思いが残りました。来年にぜひ期待したいと思います。(矢ヶ崎)

今回の訪問は、KPの病院訪問報告会に来てくださった相談室の松原玲子さんとの交流から実現しました。

また、訪問前には、院長の中島直先生直々に、「ホームページに色々な情報を載せているので見てほしい。またどんな情報が求められているかについても意見がほしい」とご連絡いただきました。見学中、中島先生自らが病院内をくまなく案内して下さり、患者さんひとりひとりに「失礼します、見学させてください」と頭を下げている様子や、ひっきりなしに院内PHSが鳴り、現場へ飛んでいく様子には、患者さんやスタッフを大事にしておられることが伝わってきて、とても感服しました。座談会では私たちの問いにじっくり向き合い、現場の本音で語って下さいました。

今回の訪問を通し、多摩あおば病院のみなさんが、患者さんや地域、市民からの目線に常に関心を寄せて、「病院はどうしていくといいか」を考えていらっしゃる姿勢であること、そうした理念が、スタッフ全体に醸し出され、中島先生のおっしゃる「院内には“退院はするもの”だ」という雰囲気がある」という風土や、地域の中核を担う急性期病院でありながらも、患者中心の医療や退院支援の実現に結びついているのだと強く感じました。(三瓶)

【座談会】

【参加者】

(現地) 安宅さん、池畑さん 吉川さん 中森さん 前田さん 平井さん 大倉さん、
三瓶、矢ヶ崎 (オンライン) 山田さん、 村山さん 神鳥さん 稲川さん 田辺さん
竹多さん 関さん、小沢さん くらさん 矢崎さん

今年度の病院訪問を終えて、12/4にKPメンバーで座談会をオンライン併用でおこないました。病院訪問で感じたことを発表したあと、みんなで自由に意見などを話し合いました。



【病院訪問について】

<病院の対応>

- ・対応して下さったみなさんは、紳士的で、職責をもって仕事をしているなど思った。
- ・「病院を開いていこうという意識を持っている」のかなと感じた。
- ・隅から隅まで見せていただけて、KPが信頼されている団体になってきたのかなとも感じた。
- ・KPとやり取りをしようと考えてくれていることは、つまり「改善しよう」という意識がある病院なんだろうと思った。
- ・時間の制限があって、病院側の主導で動いた病院もあった。病院が見せたいものを見たという感じもあって、複雑な思いがした。
- ・年度はじめに病院訪問についてというアンケートを送ったが、返信のない病院も多い。どう感じているのだろうか・・・。
- ・訪問の日程調整の段階で、訪問が中止になってしまった病院があった。もしかしたら、今まで発行した訪問記をみて、何かを感じられたのかもしれない。理由をお聞きしたい。

<冊子化に向けて>

- ・KPが感じたことや意見を掲載するのは本来の姿だとは思う。(病院の宣伝ではない)
- ・KPの「伝えたい」は大事だが、病院側の意向も尊重したいし、配慮したほうがいい。
- ・KPの内部だけで共有していくという形もあると思う。
- ・病院も「あばかれる」というような感じに受けとると、訪問に抵抗があるかもしれない。
- ・何の目的で訪問するのか、どんなスタンスなのかをKPとして考え続ける必要がある。
- ・冊子にすることで、実際に入院する人や通院する人にとって、意味のあるものに出れたらという思いはある。
- ・冊子(訪問記)を読んだ病院が「うちも見に来て」と思ってもらえるような冊子になると良い。
- ・病院さんと一緒につくっていくという意識があるといいのかなと思う。
- ・みてくれた人がなにか考えてくれたり感じてくれたりするような冊子になるといいな。
- ・訪問のお礼もかねて、冊子化の前に記事を確認してもらいたいと思う。

<これからの病院訪問>

- ・1回の訪問で終わるのではなく、病院さんをつながりながら、やり取りを続けていくということも大事だと思う。
- ・地域とどんなふうに関連しているのか関係をもっているのかということもきいてみたい。
- ・訪問の前に、事前に打合せや、また座談会をしてもらった病院もある。見学するだけでなく、そういうつながりもほしい。
- ・訪問先の病院さんからの「病院からみなさんへ」とか「病院からメッセージ」などとして自由に寄稿いただくのはどうか。
- ・何の目的で訪問するのか、どんなスタンスなのかをKPとして考え続ける必要がある。
- ・「病院訪問についての分科会」的な場で対話し続ける必要があると思う。
- ・3年間で70病院中19病院の訪問ができた。
全部の病院の訪問ができるように続けていきたい。

【携帯電話の制限と面会のこと】

- ・今年訪問した4つの病院は、病棟内で携帯電話の使用が認められている病院はなかった。
- ・今年の3月末に、厚生労働省は「可能な限り、携帯電話等を自由に使用できることが望ましい」という通知を出しているのを見たが、それを病院側がどう受け取っているのかが気になるところ・・・
- ・「検討している」ということも聞いたが、「いつまで検討するのか」ということも気になる・・・
- ・昨年入院を経験しました。その病院では、スマホはナースステーションに預けて、午前1時間、午後1時間の院内外出の時に、使わせてもらえた。病棟内では使用できなかった。
- ・コロナ禍をきっかけに、面会が予約制で15分という時間制限をしているという病院があった。コロナ禍によって制限されたことが今も続いていることの違和感がある。
- ・コロナによる制限が解除された今でも、制限を設けている病院が多くあることの不思議。管理を強めたことをいつ弱めるのか、それを変えることの難しさなのかもと思った。
- ・病院とくに精神科病院は、医師の力が圧倒的で、強い環境だろうと思う。そのため院長や医師の方針でいろいろな制限が出来てしまう。面会もそうだろう。「面会が、患者の治療や家族の安心につながる」という視点よりも、「管理しやすい」という一面になりやすいように感じる。
- ・入院していた時に、家族が面会に来てくれたことがとてもうれしかった。面会をもっと自由にさせてもらえないかな。
- ・ある病院では、「KPとか外部の人にみてもらうことが大切」と話されていた。同じように面会も大切と感じてもらえないだろうか。



【いろいろ・・・】

入院期間が少し短くなったとは聞くが、とはいえ**長期入院**の人が多くいるということ
をきちんと意識して病院訪問をしたい

やっぱり・・・認知症の入院ということが気になる。今後も動向を注視したい。

喫煙や おやつのこと
も気になるな～

清潔感やアクセシビリティ（病院の情報の得やすさ、利用のしやすさ）は良くなって
いると思う。

ホームページの情報の量と質も気になる
ところ。診療の内容だけでなく、実績もわかる
といいのかな・・・。

病衣のことも気になった。下着も含めて一律でリースという病院もあれば、選
択できる病院もある。

「医療のソト」の
ことも気になる。

活動を継続することでもっとアップデートして
いってもらえたらと
感じる
ところ
はあった。

病院ごとに「長期入院をさせない」「子どもの精神医療、児童相談所や家庭からのニーズ」「地域に根差した病院」地域に特化し、今の地域のニーズにこたえようという役割を担っていることを感じた。

〈対話はつむぐ〉

2023年度は6病院、2024年度は9病院、そして2025年度は4病院を訪問し、これまでに神奈川県内70病院のうち19病院を訪れました。こうして積み重ねてきた経験をまとめた冊子『かながわ精神科病院訪問記 いて・みて・きいてきた』には、その年のテーマがあります。1冊目は「さいしょの一步」、2冊目は「対話のはじまり」、そして3冊目の本誌には「対話はつながる」と、訪問活動が毎年少しずつ成長しているように感じます。

病院を訪れて、そこで働く皆さんに直接お会いすることには特別な意味があります。建物の構造やルールを知るだけではわからない、その病院の空気に触れられるからです。実際に行って、見て、感じたからこそ聞いてみたいことが生まれ、そこから自然と対話が広がっていきます。チェックリストで「できている・できていない」を判定するのではなく、対話を通して病院が悩んでいることや、チャレンジしていること、そして地域のなかでどのような役割を担おうとしているのかが見えてきます。

訪問活動に参加するメンバーの考えや病院への期待も一人ひとり異なります。毎回の訪問後には、感想や気づきを皆で共有します。同じ場を見ても視点や感じ方は様々です。訪問活動を振り返った座談会でも多様な意見が集まりました。多様な視点や考え方があるからこそ対話が深まります。

これから訪問させていただける病院が広がり、さらに多くの対話がつながっていくことを楽しみにしています。(田辺)



病院訪問は、「病院のことをもっと知りたい」「病院を利用する側の声を届けたい」という思いから始めたものだと思います。

でも、訪問を重ねることで、KPの相談活動そのものを振り返るきっかけにもなっているような気がしています。

今年度の訪問では、病院のみなさんとの対話の中で、病院が大事にしているという4つの言葉が心に残りました。

「一律ではない(その方その方を見るということ)」

「(できるかわからないけれど)チャレンジするんだ」

「勇気をもってかかわる」

「(できないと)思い込んでいないか」

どの言葉も、日々の相談活動の中で、KPにとって大切にしたいことばかりです。ああ、病院訪問って、こちらが“知るため”に行っているだけじゃないんだな。

病院の方との対話の中で、私たち自身が教えてもらっていることもたくさんある。そうか、これは双方向なんだ——そんなふうに感じました。



【KPとは・・・】



定例会の様子

2020年5月に立ち上がった、KP神奈川精神医療人権センター（通称：KP）。「精神医療や地域福祉を利用する本人“わたし”の意思が尊重され、自分の生き方を自分で決められる社会」「誰もが安心して受けられる精神医療の実現」を目指して活動しています。

私たちが大切にしているのは、次の4つの理念です。



声を
きく



扉を
ひらく



社会を
かえる



仲間（ピア）が
ささえる

これらの考え方をもとに、次のような活動を行っています。

- ①電話やメール、面会などを通じた相談活動
- ②精神科病院への訪問、地域や行政との対話、ネットワークづくり
- ③精神保健福祉資料（630調査）の情報開示請求や公開、講演などによる啓発活動

日々の活動はボランティアが主体となっており、運営はサポーターの皆さまからの寄付によって支えられています。

<サポーターを募集しています>

わたしたちKPの活動（病院訪問や相談活動、普及啓発事業など）は、サポーターのみなさまからのご支援で成り立っています。活動を継続していくために、サポーターとしてお力を貸していただければ幸いです。

また、当法人は、認定NPO法人の指定を受けております。寄付金について、税制上の優遇措置（寄付金控除等の所得税の控除）を受けることができます。

（振込先） 横浜銀行 杉田支店 普通 1530250
特定非営利活動法人さざなみ会



←こちらから
銀行振込
または
クレジットカードが
えられます。



【おわりに】

イソップ寓話「北風と太陽」では、
北風と太陽が旅人のコートを脱がせられるかで力比べをします。
北風が強い風で無理に吹きつけても、旅人はコートを押さえて脱ごうとしません。
一方、太陽があたたかく照らすと、旅人は自分からコートを脱ぎました。

やさしさや温かさのほうが、力づくよりも人を動かすことができる——そんな話です。

KPはどうでしょうか。
わたし自身が、家族が、友人が、そして同僚が…
通院や入院をして治療を受ける場だからこそ、安心して利用できる環境であってほしい。

だからこそ、太陽のようにあたたかな存在として、病院を訪問ができたらと
そんな思いを抱きながら、今回の病院訪問を行いました。

多くの医療機関のみなさまにご協力いただきました。
お忙しい中、KPとの対話の時間をつくっていただいたこと、心より深く感謝申し上げます。
(KPメンバー)

2023年度訪問の病院		2024年度訪問の病院		2025年度訪問の病院	
1	医療法人誠心会 あさひの丘病院	1	学校法人昭和医科大学 昭和医科大学横浜市北部病院	1	公益財団法人積善会 曾我病院
2	医療法人徳洲会 横浜日野病院	2	医療法人社団哺育会 横浜相原病院	2	医療法人社団清伸会 ふじの温泉病院
3	学校法人聖マリアンナ医科大学 聖マリアンナ医科大学病院	3	社会福祉法人恩賜財団 済生会横浜市東部病院	3	医療法人社団元気会 横浜病院
4	特定医療法人鵬友会 横浜ほうゆう病院	4	医療法人社団養心会 鶴見西井病院	4	医療法人財団青山会 みくるべ病院
5	IMSグループ医療法人社団明芳会 江田記念病院	5	公益財団法人積善会 日向台病院		
6	医療法人清風会 富士見台病院	6	医療法人社団清心会 藤沢病院		
		7	医療法人社団増田厚生会 清川遠寿病院		
		8	医療法人社団やすらぎ会 神奈川中央病院		
		9	地方独立行政法人神奈川県立病院機構 神奈川県立精神医療センター		

〈参考〉

- ・(大阪府) 医療法人和気会 新生会病院
- ・(東京都) 医療法人社団新新会多摩あおば病院
- ・(ベルギー) ZAS Cadix (ザス カディックス総合病院)
- ・(ベルギー) Bethanie (ベタニア精神科病院)
- ・(ベルギー) OPZ Geel (ヘール公立精神医療ケアセンター)
- ・(ベルギー) UKIA (ウキア大学病院)

かながわ精神科病院訪問記 VOL:3 (2025年度)

いって・みて・きいてきた
～わたしたちの視点で見学してきた～

発行日：2026年3月
発行：KP神奈川精神医療人権センター
編集：三瓶芙美、矢ヶ崎洋恵
発行者：認定NPO法人さざなみ会
KP神奈川精神医療人権センター
〒235-0023神奈川県横浜市磯子区森6-1-10
TEL:080-7372-7432
MAIL:kp.kanagawapeer@gmail.com

KPを応援してくださるみなさまに感謝を込めて。
いつもありがとうございます。
そして
これからも、どうぞよろしくお願いいたします。



認定NPO法人さざなみ会

KP神奈川精神医療人権センター

相談電話：080-7295-8236（平日13：00～16：00）

MAIL：kp.kanagawapeer@gmail.com

ホームページ：<https://kanagawa-peer.com/>
※日々の活動を投稿しています。



2026年3月発行

